

シン・研修報告書 富山県医療ソーシャルワーカー協会

令和4年度第2回定例研修会

テーマ「災害時のSW支援について

～万が一に備えて、実体験を聞いて考えることから～

特別支援事業について 富山市民病院 八木智也氏

経験談 済生会高岡病院 藤川 泰永氏

富山福祉短期大学 中村 尚紀氏

開催日：令和5年1月28日 14：30～16：30

会場：富山市まちなか総合ケアセンター 1階地域連携室

参加者の声：横田記念病院 笠木 悠史さん

研修では、東日本大震災で実際に被災者支援を行ってきたソーシャルワーカーの活動報告、実体験を聞くことができました。

被災後のリアルな話、被災者、被災地の**現場の生々しさや空気感**などを聞くと、時間が経過した**今でも胸が詰まり、何とも言えない感情になりました**。自分だったらどのような支援が出来るのかを考えさせられる内容の研修でした。

被災地支援でのソーシャルワーカーの苦悩や苦勞も聞くことができ、被災地での活動はストレスも多く、**自分を保つ心やメンタル**に大きな影響を与えるということを感じました。

その中で、被災地入りする為の**事前準備、自己覚知、ストレスマネジメントやセルフコントロール**といった支援者自身の心のケアに加え、長時間滞在している支援者へのフォローアップやスーパーバイズといった支援者への支援、チーム対応が大切であるということ学びました。

また、現地での相談支援は、ソーシャルワーカーが入れ替わり立ち替わり行うバトン方式の支援になる為、**情報の共有、コミュニケーション能力(伝える力)、誰が見ても理解できる記録(5W1H)、根拠付け**が重要で、これらは普段からのソーシャルワーク業務でも意識的に実践していくことが可能であり、日々の業務から心がけて取り組んでいきたいと思いました。

広報事業の一言つぶやき

被災地のニーズは被災地の支援者が一番良く理解している。対応しなきゃいけない難しいケースがあることも理解している。けれども被災の真ただ中で今はどうにもできないことを痛感しているのも被災地の支援者なのだから、優先順位をつけながらも、ケースを掘り起こしすぎず被災地の支援者に負荷をかけないように支援をしてきてほしい。」

これはある広報事業のメンバーが被災地に向かう時に、被災地と連絡を取り続けてきた所属長に言われた言葉だそうです。今回の被災地支援の研修を通して、自身の価値判断ばかりではなく、相手がなぜそのような言動に至ったのかを日頃の実践で考えてきたいと思いました。

研修会の様子



八木さんの特別支援事業のお話



藤川さんの経験談



中村さんの経験談



意見交換



急遽始まったロールプレイ

中村さんの急な提案で急遽災害支援で経験したケースのロールプレイがはじまりました。

一つ目は避難所で家族を失って号泣するケース。

→実際その時の対応はその方の背中をさすり、その方が色々話すことを傾聴しながら一緒に気持ちの整理をしました。その後は避難所の本部に声をかけ、その方をサポートしてもらうようお願いしました。

二つ目は福祉避難所でSWが入り代わり立ち代わり変わることにより色々聞かれ怒り心頭なケース。

→実際その時の対応はその方が、仮設住宅への不安による投射の反応を起こしていたため、話を聞き一緒に不安を和らげるための整理をしました。その後は中長期的に来るSWがその方の対応するよう調整しました。